

子どもありのまま愛して

子育て中の母親らのサポートに取り組んでいる長崎女子短大の「保護者支援・教育研究所」(倉成史所長)は、教育・心理・医療・福祉の4領域から子育ての極意を追究した冊子「そして親になる」を刊行した。自己や他者への基本的な信頼感を育む幼児期の「愛着形成」を重視し、「母親はその子のありのままを受け入れて愛するだけでいい」と伝えている。

長崎女子短大「保護者支援・教育研」

核家族化や地域のつながりの希薄化により、現代の母親は孤立、子育ての不安を一人で抱え込みがちになっている。倉成所長は「母親が子どもに何をしたいのか分からなくなってきた。確かな情報を伝えてほしい」と言う。

冊子は、親から愛され安定した親子関係が築かれれば、自分への自信と他人や世の中に対する信頼感が生まれ、社会に積極的に関わろうとする「生きる力」が育つという「愛着形成」の重要性を指摘。「子どもは抱きしめられた肌の感覚を頼りに、それが心地よく安心できるものであれば、自分が受け入れられていることを感じ、人や世の中を肯定できるようになっていく」という。

しかし、現実には幼児期に愛着形成ができておらず、心の不安定な子どもが増加。教育現場で必要なしつけができない事態

子育ての極意追究

「愛着形成」重視



「そして親になる」刊行



「そして親になる」



子育て支援冊子をつくらせた倉成史所長(前列左)ら「保護者支援・教育研究所」のメンバー
=長崎市弥生町、長崎女子短大

にもなっている。倉成所長は「この10年で圧倒的に増えている。間違いなく危機的状況と訴える。親自身の愛着形成が不十分で子どもにうまく愛情を伝えられず、その子も愛着形成ができない。そういう負の連鎖も見られる」という。

同研究所は昨年8月に設立。臨床心理士や助産師、幼児教育の専門家ら9人を集め、「愛着形成」の重要性に基づいた子育て支援を実施している。研究所顧問の浦川末子同短大所長は、「反社会的行動の多くが愛着形成によって未然に防ぐことができる」と話す。

親は最初から親ではなく、子どもの成長とともに親になっていく。肩肘を張らずに大切なことに目を向けて。冊子のタイトル「そして親になる」には同研究所の願いを込めた。「私たち大人ができることは、子どもが持

っている力をのびのびと発揮できるように、話を聞き、時にはサインに気づき、急がず、共に考え、その時その子の状態に応じて周囲に相談し、過剰にやむ状況を整えることぐらいではないか」

福井謙一郎副所長は「テクニック本ではなく、お母さん、お父さんたちに『大丈夫』というメッセージを送っている。元気がないとき、親になることが不安なときに、ぱつと開いてほしい」と話している。

B6変形判、68頁。千部作って県内の保育、教育関係者に無償配布した。増刷を望む声が多かったことから、一般からの注文の受け付けを始めた。400円。所定の用紙に必要事項を記入し、ファクスか郵送で申し込む。問い合わせは同研究所(電095・895・7211)。

(田代菜津美)